

ドローンの先進技術で農業を変える

FarmEye 高精度な育成評価技術で収量アップを実現

3年目のリモートセンシング「ほ場の見える化」さらに追求



常に進化を遂げるリモートセンシング技術。更にパワーアップした解析技術を駆使し、今年度も追肥を実施してまいります。今回は可変追肥後の結果測定を予定しております。

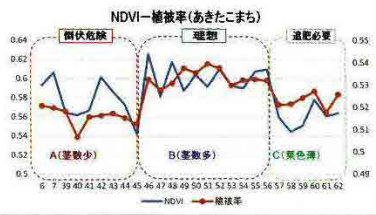
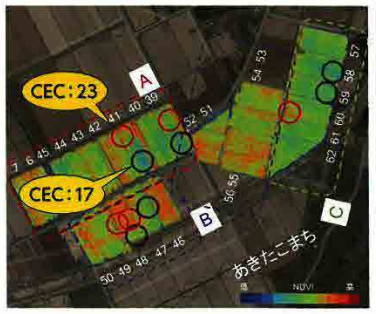
〈日程〉
撮影日・7月29日
追肥・8月7日
結果撮影・8月17日
秋に結果をご報告させていただきますので、お楽しみに。

生産者通信

(有)エコ・ライス新潟
定価 100円(送料込)

事例

●ピンポイント土壌診断



処方改善により収量の増加が見られました。

3.9俵向上

植被率小 → リモートセンシング → ピンポイント土壌診断 → CEC低め
CEC: 陽イオン交換容量保肥力を表す

可変基肥に重点を置き「土の改良」を実施
加えて「可変追肥」も実施

2016年 7俵 (41, 40, 39)
2017年 9.7俵 (41, 40, 39)
2018年 10.9俵 (41, 40, 39)

3.9俵UP (実例となります)

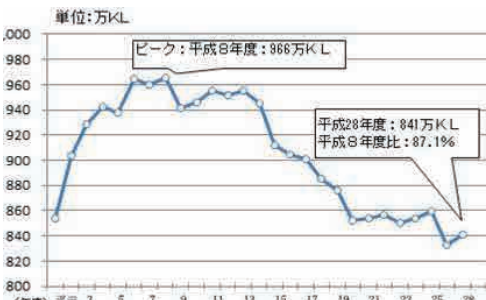
その他実例 ● 千葉県では反1.5俵UP ● 山形県では反0.4俵UP

日本国内では高齢化・人口減少によりアルコールの消費が減っています。その中でも日本酒の消費量は、一年で一番の売れる12月と平成29年12月と比較して89.7%と大きく減らしています。その中で、旭酒造「獺祭」の販売の伸び方は驚異的です。本年2月には輸出が国内販売を逆転しました。

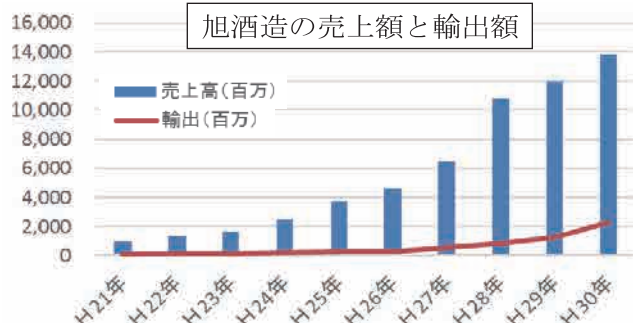
世界に日本酒を広げる獺祭の伸び率に驚愕(その1)



苦境のアルコール業界で異彩を放つ!!



資料: 国税庁統計年報より



市場が縮小する日本から世界に向けての残れないのかもしれない。